ぼくらのせかい

海野 朔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ぼくらのせかい

【Ｎコード】
Ｎ０２４３Ｄ

【作者名】
海野　朔

【あらすじ】
幽霊になった若宮悠。独りぼっちになった彼女の前に現れたのは、要太陽という同じ幽霊の少年だった。

０１．おわるせかい

ピッ……ピッ……ピッ……ピッ……

不定期に鳴る機械音。
自分の命のカウントダウン。
先程まで耳障りなまでに響いてきたそれが、意識が薄れるにつれ段々とゆっくりになっていく。
私は、ただただそれに恐怖した。
それと同時に、不思議な安堵感もあった。
すでに痛みや苦しみは無かった。
四肢が裂けるような、あんな苦しい思いは、もうしなくて良いのだ。
なにより両親の、自分より辛そうな表情も、もう見なくて良いのだ。
後はもう、静かにその時を迎えるだけなのだろう。

けれどまだ、死にたくなかった。

何もしていないのだ。
生まれてきて１４年と少し———自分はほとんど、この病院の中で過ごしてきた。

元気に学校に通う事も
友達と一緒に笑い合うことも
好きな人を作る事さえも

できなかった。

外に行く事も我慢し
苦い薬と痛い注射に耐え
いつ止まるか解からない心臓を励まし
死への恐怖に怯え

この狭過ぎる空間で、必死に生きていた。
それが私の、日常だった。

私は、この白くて消毒液の匂いのする空間で、短い生涯を終えるのか。

ピッ……ピッ……ピッ……ピッ……

嗚呼、せめて

ピッ……ピッ……ピッ……

一度で良いから———

ピッ……

学校に、通ってみたかった。
友達や好きな人を、作ってみたかった。

外の世界に、触れてみたかった。

ピーーーーーーーーー

最期の音が聴こえる。

この日私は真っ白な空間で、眠るように最期の時を迎えた。

02．ひとりのせかい

花が咲き、散って
緑が芽吹き、雲が流れ
雨が降り、土に滲みて大地は息衝き
緑だった葉が赤く色付き、また散っていく
やがて雪が降り、一面の銀世界に心震わせていたら
あっという間に溶けて、また緑が芽吹き出した

――――気が付けば
私が死んで、一年以上の月日が流れていた。

＊＊＊

「おはよー」
「おはよう」
「う～すっ！」

ある者はどこか憂鬱そうに
ある者は満面の笑みを浮かべて
月曜日の朝、校門の前を通る生徒たちがそれぞれ親しい友人たちに
挨拶を交わしていた。
その光景を羨ましく見ていた私――――若宮悠は、そっと溜息を吐いた。
いくらお揃いの制服を着ていても、私はあの光景に加わることは、
決してないのだ。

（だって、死んでるんだもん…）

そう、私は1年以上も前に死んでいる。
この世に存在してはいけないモノ――――いわゆる、幽霊というヤツだ。
確かに自分は死んだハズだ。

そして

気が付いたら、一度も身に纏った事の無い制服を着て、この…本来自分が健康だったら通っていたハズの中学校にいた。
最期に学園生活に対して未練たらたらで死んでしまったのがいけないのか
哀しい事に、未だに成仏できていないのだ。
以来ずっと、この天草中学校の3年3組の教室にいる。
夜になって、生徒や教職員が帰ってからは教室を抜け出して校内の色々な所を探検したりもした。
でも、日のあるうちはなんとなく、この教室から離れないでいた。
多分、皆と一緒の空間を共有して、私もここの生徒になったつもりでいたいのだ。

その日の休みの人の机を借りて
先生のつまらない授業を聞いて
窓の外の景色を眺めて
クラスメイトの冗談に一緒になって笑って

そうして、あっと言う間に一年が過ぎてしまったのだ。
卒業式で、皆がこの学校を去るのと同時に、私も成仏出来ると思っていた。

けれど私はまだこの世界にいて、新しい顔ぶれの3年3組の仲間たちと、また同じ授業を受けている。
どうしたものかと思う。
もしかしたら、ずっとこのまま同じ事の繰り返しなのかもしれない。

（う～ん、このままだと……学校の七不思議になっちゃう？）

だが悲しい事に、私がず～っとこの学校にいるにも関わらず、女生徒の幽霊を見たという目撃情報は一件も無い。
そもそも私はここに本当にいるのか、それすらも解からなくなってくる。

鏡にも映らず
人にも気づかれず
壁すらもすり抜けてしまう。

（私は、ここにいるのに――――）

誰か――――誰でも良いから、私に気づいて欲しい。

学校の怪談になるのも嫌だけど
本当に嫌なのは、このまま誰にも気づいてもらえず、この世界から消えてしまう事。

ここに人はたくさんいるはずなのに、やっぱり私とは違う時を生きていて
まるで透明な境界線の向こうとこっちで世界を区切られてしまったみたいで
私は、この世界でたった一人きりになってしまったかのような感覚に陥る。

そう考えるたびに、暗闇に飲み込まれたかのように目の前が真っ暗になり、冷たいモノが背筋を這う。

（お願い、お願い、お願いだから……！）

だれか、私に気づいて下さい。

声にしたはずの言葉は、誰に聞かれることも無く、宙に消えた。

０３．かわるせかい

幽霊の身体というのも、ある意味便利なのかもしれない。
授業中に堂々と一人で立っていても全然注意されないのだから。

「で、次にこの公式を使って――――」

チョークの音と共に、教師の説明がだらだらと続いていく。
私は、その教師の説明をＢＧＭに、窓際に一人立ってぼんやりと外を見ていた。
今日は欠席者ゼロで、席がないのだ。
そんな日は、窓際や教室の隅に立って、大人しく授業を受ける。
別に騒いでも一向に気づかれないのだが、皆が真面目に授業を受けている中で騒ぐのは、なんだか悪い気がした。
それに、一人で騒いでも虚しいだけだ。
なので、こんな日は立ったまま授業を受けて、時々身を乗り出して、窓の外から見える景色を密かに楽しんだりしている。
グラウンドで体育をする他のクラスの生徒を見たり、季節ごとの風景を眺めたり、飽きる事は無かった。
それに、ずっと立っていても全然疲れないというのは、とても嬉しい。
生前は病弱で、少し外に出ただけですぐに熱を出し、一日中病室のベットの上だった事も多かった。
それに比べたら、死んではいてもこうして歩き回ったり出来るのは、素晴らしい事だった。
教室に湧き上がった生徒たちの笑い声に、顔を上げる。
数学教師のくだらない冗談が、思いのほか受けたらしい。
そういえば、去年もこの先生は同じ冗談を言っていた気がする。
多分、毎年この公式を教える時に使うお決まりの冗談なのだろう。

教師のどこか得意げな顔を、ぼんやりと眺める。

きっと、来年も同じ冗談を言うんだろうな。

そして自分は、またこの教師の同じ冗談を聞くのだろうか。
教師が移動になら無い限り、そうなりそうだと容易に想像が付いた。
このままの状態でずっと同じ日常を繰り返していれば、成仏なんて夢のまた夢だ。
いい加減、どうにかしなければと思うのだが、どうして良いのかすら解からない。

もう、霊能力のある人間が、都合良く自分の前に現れるのを待つしかないのかも。

諦めムードを全身に漂わせつつ、ふわりと宙に浮いてみる。
この宙に浮くという行為も、幽霊になって便利だと感じた事の一つだ。
最初は恐くて高い所まで浮く事もできなかったが、今ではもうすっかり慣れて、空中で方向転換も自由自在だ。
ごろりと不貞寝するように、空中で横になってぷかぷかと漂う。
すっかり落ち着きを取り戻した教室内は、数学教師がまた淡々と授業を進めていた。
生徒たちも真面目に教師の話を聞いているが、もうすぐ授業終了だからか、そわそわしてる者もいる。
教師に見つからないように、こっそり手紙を回し合っている女生徒たちの行動を、目で追う。
上から見ると、手紙の内容から目が合って笑い会う姿までよく見えた。

（良いなぁ…）

私もあの中に、一度で良いから混ざってみたかった。
そんな事を思っていると、教室のドアの前を何かが横切る気配がした。

「？」

私は慌てて、横になっていた身体を起こした。
ちなみに、二ヶ所あるドアは換気と温度調節のために全て開け放たれている。
夏に近づいているため日に日に暑くなって来たが、昨日雨が降った事もあってか、今日は気持ち良い風が吹いていた。
誰か人が通った気がしたんだが、足音もしなかったし気のせいだったのかもしれない。
教室内を見渡すが、誰も廊下に注意を払っている様子も無かった。
だが、すぐに開け放たれたドアから、ひょいっという効果音まで付けて男子生徒が顔を覗かせた。

「！」

気のせいかもしれないがばっちりと、目が合った。
更に、授業中にも関わらず、男子生徒がずかずかと教室に入って来た。
だが、教室内にいきなり侵入者が入って来たにも拘らず、教師も生徒も誰も反応しない。
それどころか、何事も無かったかのように完全スルーで授業をしている。
その姿に、もしかしてという期待が高まる。

男子生徒は、真っ直ぐ私の所まで来ると、私を見上げてにっこりと笑った。
そして、私に向かって少し困ったような顔で話しかけたのだ。

「…え～っと、こんにちは？」
「……こ、こんにちは」

一人ぼっちだった世界が、劇的に変わった瞬間だった。

０４．あたたかいせかい

私の前に現れた少年は、『要太陽』と名乗った。
そして、予想通り私の―――『仲間』だった。

「オレ、要太陽。つい最近交通事故で死にました」

猫を庇ってこっちが死んだという、ベタな理由なんだ～。
要太陽と名乗った少年は、砕けた口調であっさりと、自分の死因を話した。
表情もにこにこと笑顔で、憂いも何も無く、とても幽霊とは思えない表情だ。
底抜けと言っても良いほど明るい表情。
顔色は悪いけど、健康的に日に焼けた肌。
少し着崩した制服。
その足元に影さえあれば、生きている人間と何も変わらないだろう。

「私は、若宮悠。一年前、病死で……」

次はこっちの番だと、改めて自己紹介をした。
幽霊になってから誰かと話をするなんて、初めての事だったから、なんだか不思議な気分だ。

「要くんは、いくつなの？」
「太陽で良いよ。オレは１４歳、中二ね。若宮サンは？」
「私も悠で良いよ。私は……死んだのが１４歳で、去年死んで誕生日過ぎてるから１５歳って事になるのかな？」

それとも、もう生きている人の世界とは違う次元にいるんだから、

永遠に１４歳のままなのだろうか。
幽霊なのだから、もう成長する事は無いんだろう。
それを思うと、少し寂しく感じた。
でも、そんなしんみりした気持ちも、太陽の「えええぇぇ！」という叫び声に、吹き飛ばされる。

「それじゃあ、悠…さんって先輩じゃん！うわー、タメで話しちゃったし…」

今までに無いほど慌てる太陽に、こっちも慌てる。

「いいよいいよ！タメ語でっ！呼び捨てでっ！幽霊だから年取って無いだろうし…同い年って事で！」
「そっか……そういや幽霊だから、もう年取らないんだよな」

私の言葉に、太陽も納得したように頷いた。

「う～ん、永遠の１４歳かぁ。……昔のアイドルみたいなキャッチフレーズだな！」

……何かが激しく間違ってるような気がするのは、気のせいだろうか。
でも、自分ではとても思いつかない太陽の言葉に、救われたような気がした。
それに、誰かと話せると言う事は、とても嬉しい。

「じゃ、幽霊仲間って事で、これからよろしく！」

その言葉と共に、こちらに手を差し出す太陽。

「……うん、よろしく」

私は、おずおずと自分の手を伸ばし、その手に握手した。
触れ合っているはずの手は当然感触も無く、ひんやりとした冷たい空気に包まれている感じがした。
きっと握り過ぎてしまえば、お互いの手を突き抜けてしまうのだろう。
お互いに触れ合う事は、もう決して叶わない。
けれど、触れ合った感触は、感じなくても確かにあった。

そして私には――――

その冷たい掌が何よりも、温かく感じた。

求めていたモノが、ここにあった。

05．おなじせかい

「へ？悠はこの学校の生徒じゃないの？」

心底意外そうな太陽の言葉に、こくりと頷く。

「うん。本当はこの学校に通うはずだったんだけど、ずっと入院してたから……」

普通の学校にはほとんど通えず、小さい頃からずっと院内学級で勉強していたのだ。

それも、最期の方にはほとんど通えなかったんだけど。

「ずっと普通の学生生活に憧れてて、死んで、気が付いたら制服着てここにいたの」

最初は自分が死んだという事も忘れて、はしゃいだりもした。

女子生徒たちの噂話の輪に一緒に入ってみたり、授業を一緒に受けたりしたけど、結局は皆とは違う世界にいるという事を思い知らされた。

最近はずっと、何をするわけでもなくこのクラスでぼーっと空を眺めたりしている毎日だった。

全校集会で彼が死んだという事を知らされたらしいが、私はここ最近集会に出てないので全然知らなかったのだ。

「じゃあ、オレがまだ生きてココに通ってる時もいたのかー」

「うん、ずっとこのクラスにいるから太陽の事全然知らなかったけど」

「オレ1組だし、このクラスって知り合いほとんどいないから顔出

さなかったもんなー」

納得したとうんうん頷く太陽。
どうやら彼は、一つ一つの仕草が大げさらしく、先程からリアクションがやけにでかい。
色素の薄い茶色い髪が、頷くたびにふわふわと揺れている。
ちなみにまだ授業中で、教師のだらだらとした説明をＢＧＭに、この会話をしている。
幽霊なんだから授業妨害だと言われる事も無いんだけど…ちょっぴり罪悪感を感じる。

「悠は、他の幽霊って見た事ある？」
「ううん、無いよ」
「オレも無いんだ。オレ等がいるんだから、他にも絶対いるハズなんだけどなー」

太陽ががっくりと肩を落とす。
そんな太陽に苦笑しながら、私はふと思い浮かんだ考えを口にした。

「うーん、本当は…幽霊同士ってお互い見えないんじゃないかな？」

生きている者の世界は皆同じでも、死後の世界はそうとは限らない。
もしかしたらテレビのチャンネルとかラジオの電波と同じで、一人一人違う周波の世界にいるのかもしれない。
そんな事をしどろもどろになりながらも、なんとか説明してみる。

「おお、よくわかんないけど、なんとなくそんな気がしてきた！」
「もしかしたらって話だから…本気にしないで」
「いやいや、でもそれだとオレたちよっぽど相性良いんだな」

その言葉に、ドキッとする。
熱くなった気がする顔を、そっと手で挟んだ。
いやいや、太陽は恋愛とかそういう意味で言ったんじゃないって…！
内心慌てる私に気づかず、太陽はう～んと唸り出した。

「でも困ったなー。いい加減オレも成仏したいんだけど、何故かできないんだよね」
「わ、私も…」

「じゃあ仲間だ」と、太陽がカラッと明るく言った。
そして、予想外の言葉を続ける。

「まぁ、幽霊ってのも中々体験できない経験だし、楽しむだけ楽しんで成仏するか」

……『名は体を表す』と言うけれど、太陽は正にそれだ。
私のジメジメした考えなんかをあっさり乾かしてくれる。
前向き過ぎる言葉に、救われる気がした。

自分と一緒の世界にいるのが太陽で、本当に良かった。

０５．おなじせかい（後書き）

１～４話のサブタイトル変更しました。
これからは『×××せかい』に統一（予定）。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0243d/

ぼくらのせかい

2010年12月2日02時18分発行